

キウイフルーツの果実軟腐症防止

第1報 被害実態と感染時期

小出 聖・古原剛二・*美濃徳明 (大分県農業技術センター*大分県農業実践大学校)

Kiyoshi KOIDE, Goji KOHARA, Noriaki MINO : Control of Kiwi Fruit Ripe Rot.

1. Occurrence and Infection period in ÔITA

近年のキウイフルーツの増植は目覚しく、県内でも栽培面積は150haに及んでいる。当初は全く無農薬で栽培できると言われていたが、樹齢がたつにつれて種々な病害虫が発生し問題となっている。特にここ数年、果実軟腐症の発生が目立つようになってきたので、県内主要産地での発生実態と感染時期について2〜3の試験を実施したので報告する。

1. 材料および方法

発生実態調査は、県内主要産地2箇所および農業技術センターの圃場で年次を追ってハイワードでの発生果率および発生圃地の状況を調査した。

感染時期の調査は、農業技術センター圃場で2カ年にわたって実施した。1983年は、ブルーノ6年生を用い、満開直後の5月25日からブドウテラウエア用の白色袋をかけ1旬ごとに20果を除袋し自然感染させた。1984年は、ハイワードとブルーノを用い、梅雨明け後に除袋して秋季の感染の有無を調査した。

供試した果実は、いずれも20℃で追熟させ可食状態になったものを剥皮して調査した。

2. 結果および考察

主要産地における軟腐症の発生状況は、年次を追って増加しており、1984年では各産地とも50%を越え佐賀関町では100%であった。また、国東町では、この年から薬剤散布を実施しておりそのため発生果率がやや低下したと思われる。発生の多い圃地は、枝管理が不十分で棚下が暗く枯枝や果梗枝のせん除が不十分があった。また、各産地とも収穫時期の早晚による発生の差は認められなかった。

軟腐症の発生は、被袋によって明らかに減少しているが、全期間被袋しても35%も認められ被袋による完全防止は不可能と思われる。軟腐症の感染時期は、開花後から梅雨明けまでが主体で、それ以降は少ないと思われる6月中旬、7月中旬と降雨の多い区に多発しており、降雨との関連が高いと考えられる。

軟腐症の発病は、果実の硬度や果肉色と関連がありそうで、果肉色がうすく軟化しやすい果実は激発する傾向であり、果実の軟化が早い年は収穫期にすでに症状が現れ落果するものもある。

以上のように、この病気は感染時期が長く、年々激発しており、被袋による防除効果も少ないことから、難防除病害として取り組まなければならない。

第1表 年次別・産地別の軟腐症の発生(ハイワード)

年次	宇佐市	国東町	佐賀関町
1982年	20.0%	34.7%	41.3%
1983	48.4	67.3	64.0
1984	72.0	50.0	100.0

第2表 果実の露出時期と軟腐症状の発生('83年,ブルーノ)

露出時期	調査果数	軟腐症状の発生果率	降雨	
			日数	降水量
5月25日 ~ 31日	18 ^果	61.1 [%]	4 ^日	29.5 ^{mm}
6月1日 ~ 10日	20	70.0	0	0.0
6月11日 ~ 20日	19	100.0	6	129.5
6月21日 ~ 30日	20	50.0	4	25.5
7月1日 ~ 10日	20	80.0	5	47.5
7月11日 ~ 20日	20	100.0	3	45.5
7月21日 ~ 31日	20	30.0	9	38.0
8月1日~11月4日	18	39.0		
全期間露出区	20	100.0		
全期間被袋区	20	35.0		

第3表 被袋期間と軟腐症の発生('84年)

被袋期間	ハイワード	ブルーノ
6月11日~7月17日	56.7 %	30.0 %
6月11日~11月15日	64.0	22.0
無袋区	81.7	38.0